烈火の太洋6

消えゆく烈火

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1~20頁までを収録したものです。

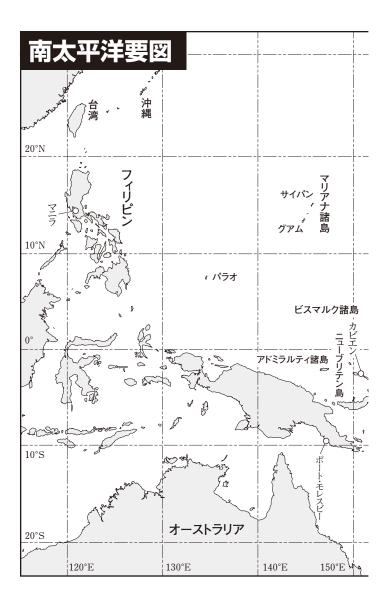
ページ操作について

- ●頁をめくるには、画面上のIP(次ページ)をクリックするか、キーボード上の□キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上 記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- ●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
- ●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

編集協力 らいとすたっふ地図・図版 安達裕章 画 高荷義之

218 199 149 75 51 27 9

		—— ज	7. '		、 ミッドウェー島
		大平	- /干		
	エニウ	ェトク環礁			
トラック環礁 。 ポナペ島			 リン環礁 		
ニューアイル) ,		
サンタイサベル島フーゲンビル島ラバウルランド島ラバウル	マライタ島	ナウル ナ			
ガダルカナル島ショートランド島		ニューヘブリデス諸島			サ モ ア
ド リッナル島 ジア島 	ニューカレドニア島	200000	 170°E	7 (10)	80°





第一章

連合艦隊の選択

1

つに見えた。 下に横たわるトラック環礁は、 公園の池のよ

連合艦隊の全艦船が入泊してもお釣りが来るほ

陸軍飛行第一一戦隊の中園三郎 准 尉は、僚機とすと、さほど広いものには感じられない。 ど巨大な環礁も、高度六○○○メートルから見下ろ

共に旋回待機しつつ、東北東の空を見つめた。 羽虫の群れのようなものが接近しつつある。

周囲を飛び回っている。 大小二種類の機影があり、小さな影は大きな影の

よりも先に上がり、 海軍の新型艦上戦闘機 ソリデーテッドB2~リベレーター〞、小さな影は 大きな影は、エニウェトク環礁から飛来したコン トラックの手前で迎撃戦闘を開 「春嵐」だ。陸軍戦闘機隊 しゅんらん

> B24が環礁の内側に侵入したら、 中園らの出番がではん

来る。

空戦闘への協力要請があったとき、参謀本部は 海軍から陸軍に、トラック、マリアナにおける防

の内側で、島を視界内に置いての空中戦なら可能と いため、洋上遠くに進出しての戦闘は難しい。 「陸軍の戦闘機乗りは天測航法の訓練を受けていな 環礁

考える」

隊は無傷のようだ。 梯団は四隊。一隊が二〇機前後 中園は、敵の様子を観察した。 前方の二隊は編隊形が乱れているが、後続する二 と回答し、陸軍機の受け持ちを決めたのだ。 一隊が二〇機前後と見積もられる。

指揮官機より全機へ。第三梯団に攻撃を集中する。 番機が環礁の外縁を越えたら、攻撃開始だ」 無線電話機の受信機に、戦隊長武内司少佐の指

示が入った。

始したのだ。

各小隊の指揮官が応答し、中園も

第三小隊

T

と、武内に返答する。「第四小隊了解」

後方から突っ込んでは、両翼から火箭を発射する。 海軍の春嵐隊は、なおB24に食い下がる。 正面や

B24もあらゆる方向に反撃の銃火を放ちながら、 の回して、撃退しようとしているようだ。 の回して、撃退しようとしているようだ。 などまます。 の群れに襲われた羆が前脚を振 がカーンで、たたがのです。

一一戦隊は急降下に転じた。

敵の一番機が、環礁の外縁部にかかるや、飛行第一二・七ミリ弾の爪は、春嵐の主翼や胴を貫通する。カウリングを貫いて火を噴かせ、B2が振り立てる

降下による一撃離脱が最も効果的だ。

蔵編隊の高度は、二○○○メートルほど低い。急

中尉の第二小隊、戸村勇中尉の第三小隊が続く。武内の第一小隊が一斉に機体を翻し、氷室平太武内の第一小隊が一斉に機体を翻し、氷室平太

中園は一声叫び、操縦桿を右に倒した。「こっちも行くぞ!」

これまで右主翼の前方に見えていたB24群が、真これまで右主翼の前方に見えていたB24群が、真

川崎ハ40――盟邦ドイツのダイムラー・ベンツ社正面に移動する。

の三番機、大友幸夫兵長の四番機が付き従う。機の後方には、森久則軍曹の二番機、岡本 栄 伍長機の後方には、森久則軍曹の二番機、岡本 栄 伍長備機である三式戦闘機「飛燕」が加速される。中園備機である三式戦闘機「飛燕」が加速される。中園が開発した液冷エンジンDB601Bを国産化したが開発した液冷エンジンDB601Bを国産化した

前方に一、二、三小隊の飛燕が見える。三名称のカラララリアの飛燕が見える。

たれた矢が飛ぶ様を思わせる。が、敵の重爆に突っ込んで行く様は、渾身の力で放が、敵の重爆に突っ込んで行く様は、渾身の力で放が、敵の重爆に突っ込んで行く様は、渾身の力で放

噴き延びた。 B23の胴体上面に発射炎が閃き、何条もの火箭が

ぐるようにしてB24一番機との距離を詰める。 武内戦隊長が直率する第一小隊が、火箭をかいく

飛燕の尖った機首から、ホ5二○ミリ機関砲の太 な胴に突き込まれて行く。 でい火箭が噴き延びる。零戦や春嵐が主翼に装備する な胴に突きがよい。常野性 な胴に突き込まれて行く。

下方へと離脱した。武内機が敵一番機の右側面をかすめるようにして、

の巨体に、ところ構わず突き刺さる。 水室中尉の第二小隊、戸村中尉の第三小隊が、続 水室中尉の第二小隊、戸村中尉の第三小隊が、続

ンから黒煙を噴き出すと同時に、機首を大きく傾け第三小隊が戦果を上げた。B2が右の二番エンジ

トラックの礁湖に向けて墜落し始めた。
た。四発重爆の巨大な機体が黒煙の尾を引きながら、

最後尾の四番機が一二・七ミリ弾を突き込まれて第三小隊も、報復を受ける。トラックの礁湖に向けて墜落し始めた。

礁湖に落下してゆく。

火を噴き、たった今墜としたB24の後を追うように、

中園は、狙いを定めたB4を見据えた。「今度は俺たちだな」

照準器の白い環からはみ出さんばかりだ。 B24の太くずんぐりした胴体と幅広く長い主翼は、

狙い定めた一機だけではない。その周囲に位置敵の射撃も、激しさを増す。

いつ命中してもおかしくないが、中園機は被弾をる機体も、一二・七ミリ弾を浴びせて来る。

を押した。目の前に真っ赤な閃光が走り、二条の太目一杯距離を詰めたところで、中園は発射ボタン免れている。

い火箭が噴き延びた。

撃を浴びせたら、

即座に離脱。

敵の銃火を浴び

□○ミリ機関砲二門を放った反動だ。 照準器が上下左右に躍 B24が激しくぶれる。

命中確認の余裕はない。一連射を浴びせた直後、

B24の胴体脇をかすめ、下方へと抜ける。 小隊の二、三、四番機が中園機に続く。

ことなく、 急降下しつつ一連射を浴びせては、速度を緩める B24の下方へと離脱している

を確認するまで、攻撃の手を緩めるな」 一敵機は、とことんまで追いかけて撃墜しろ。 飛行第一一戦隊が所属する第六飛行師団には 撃墜

ことをすれば、自分が墜とされる。

と訓示する参謀もいるが、重爆相手にそのような

る時間を、最小限に留める。

これが生存のためのコツだった。

基から炎と黒煙を引きずり、 第四小隊が攻撃したB24は、 中園は後方を振り返った。 落伍しかかっている。 エンジン四基のうち

> ち二基に火災を起こさせたのだ。 てよいだろう。 高度三○○○まで降下したところで、 まだ撃墜には至ってい ないが、 撃墜確実と判断し エンジン四基のう 機体を引き

起こし、水平飛行に戻る。

高

度を落としたりしている。 上空では、四機のB2が黒煙を噴き出したり、

飛行第一一戦隊の戦力は飛燕三七機。この日の出

撃機数は|||||機だ。

式戦闘機「鍾馗」が装備する空冷エンジンに比べ 飛燕が装備するハ40は、 一式戦闘機 「隼」や二

禁禁: 航空機におけるエンジンの生産管理、及び岐阜県各 新はダイムラー・ベンツの技術者を 招聘し、川崎 務原にある陸軍航空整備学校における整備兵の養成の禁患 部はダイムラー・ベンツの技術者を招聘し、川崎て構造が複雑であり、整備が難しいが、陸軍航空本

に協力を求めた。

飛行第一一戦隊の高い稼働率を確保しているのだ。 ドイツ人技術者から手ほどきを受けた整備

頭の機体は、春島の上空にさしかかっているようだ。第三梯団の残存機は、なお進撃を続けている。先

中園は、三人の部下に呼びかけた。「第四梯団をやる。ついて来い!」

えている。第三梯団は鍾馗隊に任せ、自分たちは無春島の上空には、飛行第八一戦隊の鍾馗が待ち構

中園は、エンジン・スロットルを開いた。

傷の敵を相手取るのだ。

第四梯団は、既に礁湖の上空に侵入を始めている。ハ40が咆哮を上げ、飛燕が加速された。

丸みを帯びたB2の機首に、発射炎が閃いた。先まる。今度は、前下方から突き上げる形だ。反航戦の形になるため、彼我の距離がみるみる縮原が極いで、まに破話のよれに得力を対象でいる。

次々に射撃を開始した。 頭の機体だけではない。周囲に展開するB24が、

飛燕を包み込むように迫る火箭が、翼端やコクピ中園は機体を不規則に、左右に振る。

ットの真上をかすめ、後方に抜ける。

中園は、B24の前下方から突進した。胴体の真下運動性能は高い。手足の延長のように振り回せる。機種転換前に乗っていた「隼」ほどではないが、

再び目の前に発射炎が閃き、反動を受けた照準器を目がけて、二〇ミリ機関砲を発射した。

に飛び交う火箭が時計回りに回転し、飛燕が横転し中園は操縦桿を左に倒した。B24の巨体や縦横火箭は狙い過たず、B2に突き刺さった。 いっぱい が上下左右に振動する。

かけて来るが、すぐに射程外に脱する。機体は左の翼端を先にして降下する。敵弾が追い

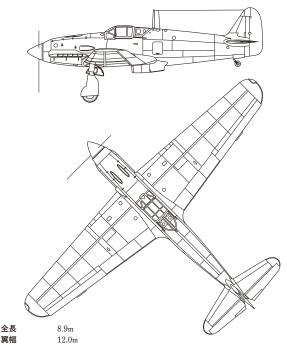
小隊長に倣い、B24の前下方から一連射を浴びせ中園機を追って、二、三、四番機が降下して来る。

B4のうち、四機が煙を引きずっているが、速度中園は機体を水平に戻し、頭上を見上げた。

て離脱したのだ。

の低下はない。飛燕隊の攻撃は、敵機を損傷させた

日本陸軍 三式戦闘機「飛燕」



翼幅 全備重量 3.470kg

発動機 川崎 ハ40型 1,175馬力

最大速度 560km/時

兵装 20mm機銃×2丁(機首固定) 12.7mm機銃×2丁(室内)

乗員数 1名

現在のところ、日本陸海軍が運用する戦闘機のうち、唯一の液冷エン ジン搭載機。液冷エンジンは空冷と比較して前面投影面積が小さくなる ことから、空気抵抗の減少効果が見込め、速力の向上が期待出来る。反面、 構造が複雑で生産が難しい欠点がある。陸軍航空本部は、ドイツから技 術者を招聘し、生産技術の指導とともに整備士の育成を進めることで、 実用エンジンとして問題ない品質と稼働率を確保した。

高速力と重武装に加え、優れた運動性能で格闘戦にも強い本機は、戦 闘機相手にも爆撃機相手にも無類の強さを発揮している。

ものの、撃墜には至らなかったのだ。 敵の第四梯団は、編隊形を崩されることなく、春

島へと向かってゆく。

に向かって、黒煙が立ち上る様が見えた。 先行するB24が投弾を開始したのか、春島から空

行兵曹長の耳に、機長と偵察員を兼ねる小杉忠太艦上偵察機「彩雲」の操縦員を務める千草はまる飛艦上偵察機「彩雲」の操縦員を務める千草はませれ 大尉の命令が届いた。 |本島の北に回れ。泊地の真上を突っ切る|

彩雲の前には、クェゼリン環礁が横たわっている。 ——昭和一五年一〇月一日以来、米太平

米軍の泊地は、クェゼリン本島の北側にある。

洋艦隊の前進基地となっている地だ。

る一〇〇式航空写真機によって、真上からの偵察写 その真上を突っ切り、彩雲の胴体に内蔵されてい

真を撮るのだ。

「北回り。宜候!」

いた。 千草は復唱を返し、エンジン・スロットルを開

エゼリンの空も、海も、 静かなままだ。

周囲を見渡すが、敵機が出現する様子はない。

栗田、後方はどうだ?」

「敵らしき機影なし!」

千草の問いに、電信員席の粟田正巳一等飛行兵曹

「ちょい左」

が答えた。

「ちょい左。宜候_

左に倒す。 小杉の指示に復唱を返し、千草は操縦桿を僅かに

もうちょい左

そのまま直進!」 もうちょい左。宜候_

このまま直進します!」

更に二度の命令と復唱を重ね、千草は操縦桿を中

る。敵機の出現も、対空砲火もない。島は、静寂したませる。 を保っている。

敵艦発砲! 不意に、 小杉が叫んだ。 離脱しろ!」

中島「誉」二一型が猛々しい咆哮を上げ、彩雲が加い場合に 速された。 千草は、エンジン・スロットルをフルに開いた。

り、 、後方から炸裂音が轟く。若干の間を置いて、風防ガラスに黒い爆煙が映

し寄せる。 体の周囲に黒い爆煙が湧き出し、横殴りの爆風が押 彩雲の前方や左右でも、敵弾が爆発し始める。

るような衝撃と共に、機体が前にのめる。 発が尾部の真下で爆発したのか、蹴り上げられ

千草が機体を水平に立て直したとき、

粟田が緊張

F

離を詰めようとしている。

した声で叫 グラマン二機、

左旋回!」

左旋回。宜候!」

彩雲の機体が左に傾き、大回りの旋回に入る。

小杉の指示を受け、千草は操縦桿を左に倒す。

ひたすらまっすぐ、速く飛ぶことに重点を置い

作られた機体だ。零戦や春嵐のような、急激な機動

はできない。 大きな円を描いて機首を西方に向け、

クェゼリン

上空から離脱するのだ。

「グラマン、回り込みます!」 粟田が叫んだ。

た旋回性能を活かして敵機の内側に回り込み、 の射弾を浴びせたように、 旋回格闘戦の要領だ。九六艦戦や零戦が、 ^ヘルキャット。も、彩雲の内側に回り込み、 敵機 ――グラマンF6 必殺

(南無三!)

ちらと、左に視線を向ける。腹の底で叫びながら、千草はなおも旋回を続けた。

のマークがはっきり見える。
「ド6Fは、彩雲の左後方から食い下がりつつある。」

F6Fが、なおも接近する。今にも、両翼の一二・下がり、機首が真西に向かいつつあることを示す。三一○度、三○○度と、羅針儀の数値がじりじり

七ミリ機銃が火を噴きそうだ。

電信員席から、粟田が歓声混じりの報告を送る。一敵弾、後方を通過!」

ようになっている。

とたまりもなく消え去る。

F6Fが追って来るが、機影はみるみる小さく、そのときには、彩雲は全速で離脱にかかっている。

遠くなってゆく。

ハ輸送船二○、駆逐艦一八、小型艦艇多数。○五五八輪送船二○、駆逐艦一八、小型艦艇多数。○五五「栗田、司令部に打電。『〈クェゼリン〉ノ在泊艦船切ったのだ。

二(現地時間八時五二分)』」

一八、小型艦艇多数。〇五五二』。司令部に打電し「『〈クェゼリン〉ノ在泊艦船八輸送船二〇、駆逐艦

ます」

小杉の命令に、粟田が復唱を返した。

小杉は千草に命じた。

「針路二五五度。ポナペに向かえ」

戦闘機ロッキードP8〝ライトニング〟が出没する来、トラックとクェゼリンの間には、双発双胴の重エニウェトク環礁に米軍の航空部隊が進出して以

の東方に位置するポナペ島を、 このためトラックの第一一航空艦隊は、 彩雲の中継点に選ん トラック

つ米軍が襲いかかって来るか分からない。 ポナペ島はまだ日本軍が確保しているものの、 r V

それでも、使える間は使う方針だった。

今一度後方を振り返ったが、F6Fの機影はどこ 千草は、針路を二五五度に取った。

にも見えなかった。

新たな攻勢の兆候はなし、 連合艦隊司令長官近藤信竹大将は、 司令部に参集

こた幕僚たちの前でぼそりと言った。 机上には、トラックの第一一航空艦隊から届け

去る四月一〇日、 クェゼリンに飛んだ艦上偵察機

られた偵察写真が置かれている。

彩雲」が撮影したものだ。

泊地警備用の小型艦艇のみが停泊している。 クェゼリン本島北側の泊地には、 輸送船と駆逐艦

艦隊の姿はない 昨年一二月、トラック沖海戦で干戈を交えた米大

同海戦終了後、

四ヶ月が経過したことを考えれば、

戦力を回復させ、 始まるとの前提で準備を進めていた。 連合艦隊司令部では、米軍の新たな攻勢は三月に 前線に姿を見せてもいい頃だ。

や、潜水艦による補給線への攻撃を仕掛けて来るも だが米軍は、 B24によるトラックへの長距離爆撃

める国です。トラック沖海戦で失った兵力の補充と のの、大規模な攻勢をかけて来る様子がない。 「以前にも申し上げましたが、米国は慎重に事を進

航空甲参謀日高俊雄中佐が、近藤の疑問に答えた。と判断したところで攻勢に出ると考えられます」 新戦力の拡充を念入りに進め、 我が軍を圧倒し得る

甲参謀の言う通りです。 地固めをしつつ、一歩一

20 が、不足していたと認めざるを得ません」 す。参謀長としましては、米国の性格に対する考察

歩確実に前進して来るというのが、かの国の性格で

は来年三月頃」と主張していたのだ。 参謀長の山口多聞中将が、近藤に頭を下げた。 四月になっても、米軍来襲の兆候がない以上、 はトラック沖海戦終了後、「米軍の来寇時期

を軽く叩いた。

る南方要域図に指示棒を伸ばし、エニウェトク環礁

誤りを認めざるを得ないと考えたようだった。。 す。そのことは、心しておく必要があるでしょう」 ただ、ひとたび動き出せば、米軍の動きは迅速で

察は、

トラック沖海戦終了後、空母「赤城」「加賀」、戦第一機動艦隊司令長官塚原二四三中将が発言した。、我が一機艦は前線に移動しなければならぬ」 題は来寇時期だ。 敵の来寇が確実となった時点

現職に留まっている。 近藤や軍令部総長嶋田繁太郎大将らの慰留を受け、 長門」喪失の責任を取り、辞任を申し出たが、

現状では、米軍の来寇時期の特定は難しいと言わ

首席参謀の高田利種大佐が、机上に広げられていする航空偵察が困難になっています」 め、航空部隊を進出させたことで、クェゼリンに対 ざるを得ません。米軍がエニウェトクの基地化を進

と共に戦闘機が進出すると、クェゼリンへの航空偵 エニウェトクの米軍飛行場が整備され、 格段に困難さが増した。 四発重爆

距離があり、足の長さを誇る彩雲でも、往復するだ トラックからクェゼリンまでは八〇〇 浬以上の

はない。 けでぎりぎりだ。敵戦闘機の行動圏を迂回する余裕

ンまでの迂回経路を取れるが、これらは速力が遅く、 式陸上攻撃機や二式大型飛行艇なら、 クエ ーゼリ

ているが、同地の上空にも米軍機が姿を見せており、 クェゼリン上空への進入は不可能と言ってい 現在は、 ポナペを中継点に使用して彩雲を飛ば , , ★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF